

平成二十六年五月二十六日

例年、冬、終はる頃より花粉症症状出でて、春先まで續き、櫻咲く嬉しさも中くらゐに留まる。大方五月に至れば快方に向ひ、街路樹の若葉は爽快なる氣分にて見るを得。

花粉盛なる時は神経過敏の態となり、テレビの花粉情報見るだにくさめ出づ。掛附けの先生出し下さる薬、眠氣と不快感を催す割には、效目無きに似たり。他方、同じ先生處方の目薬二二三滴、眼のシヨボシヨボ感たちどころに消失するは有難し。但し、濫用は重大なる副作用招くぞ。

余、かねてより目薬さす技に拙し。まづ顔を天井に向く。指先に目薬容器持ちて腕を顔より上に伸ばし上げ、天井を凝視する視線の内に容器移動して先端を下に向け、頃合を測りてスポイトを絞る。眼と容器との距離感、最も肝要なり。遠過ぐる時は所謂「二階より目薬」にて的を外し、近過ぐる時は危く眼球に觸れなむとす。上向たる儘とつかうつするうち、知らず口ばかりと開けばすなはち、傍觀する家人「口に目薬さすつもりや？」

薬とは云へ、まなこに落入る物を避けむとして目閉づるは防禦本能の然らしむる所と云ふべし。我、所々に本能の衰へあると雖も、眼を守る氣持なほ強くして、目薬入らむとするその刹那、瞼を閉づること再々なり。本能に邪魔せられたる水滴は閉ぢたる瞼の表を空しく傳ひ、顔を流れて、耳の穴に濕り氣を感じしむ。

朝、出仕前に目薬さすは妻の役目なり。かつては「目薬をさし呉れ」「目薬をささむや」等の會話成り立ちしも、夫婦日常會話の例に従ひ、自づと言葉省略「目、入れ呉れ」「目、入るる？」との遣り取りになりぬ。これを聞く他人、さぞかし奇妙に思ふらむ。

世に、疲れ目用目薬なるものありて、目を酷使用する勤め人等多用すらし。ある夕刻、電車に坐り居れば、前に立つ若者、上着内ポケットより何やら容器取出すと見るより早く、顔をやや上方に向けて、左右の目の上にそを一瞬づつ留め、また服に收めたり。水滴は見えねども、目薬さしたるに相違なし。一聯の作業、流るる如くにして、數秒の裡に終はりぬ。その早業に余、感服せり。

それより後、バスに乗車中、同様の早業にて目薬さす人見たり。レール上の電車に比し、道路の凹凸に行くバスが搖れは大きくかつ不規則。その中にて的を誤たず鮮やかなる仕草にて目薬さすこの人、眞の目薬達人とこそ見受けたれ。